

## 『天路歷程』邦訳史（一）

高 村 新 一

### （一）

ジョン・バニヤンの代表作 *The Pilgrim's Progress* の中国語訳に先鞭をつけたのはイギリス人宣教師ウィリアム・ミューアヘッド (William Muirhead) で、『行客経歴伝』（一八五二）と題されたが、これはダイジェスト版で、日本への影響はなかった。

これと相前後して現われたのがバーンズ (William Chalmers Burns 一八一五—六八) の訳である。<sup>(1)</sup>バーンズはスコットランドに生まれ、グラスゴウ大学を卒業、のちに宣教師として中国に渡り、目覚ましい宣教活動を行なった人物であった。彼は多数の翻訳も手がけ、そのうちのひとつが、中国人の協力を得て完成したバニヤンのこの傑作の訳で、『天路歷程』という題名が与えられた。

『天路歷程』邦訳史（一）

わが国最初の翻訳はこの中国語訳からの重訳であり、『天路歷程』<sup>(2)</sup>という題名も、そっくりそのまま借用したわけである。植村正久が「ボルンス氏の訳述せる天路歷程は余輩が英文を解せざるときに愛読せし所なり」<sup>(3)</sup>と述べているのはこの本である。この訳は、『七一雑報』誌上<sup>(4)</sup>に、明治九年四月一四日（第一卷一五号）から、同一〇年八月二七日（第二卷三四号）まで、六六回に分けて連載された。

この訳がほんの僅か手を加えられて明治一二年に単行本となった。しかしその僅かな変化も筆者にとってはなかなか興味深いので、そうした点も含めて、明治初年の翻訳文学の一例として、その実態を報告することが筆者の目的である。これについて従来、紹介や説明がなかったわけではないが、ごく簡単であったり、不正確であったりするので、敢えて

これを試みることにしたわけである。

まず『七一雑報』連載の分から見に行くことにしよう。第一回分は基督徒(Christian)が伝道者に行くべき道を教えてもらうくだりまでであるが、最初なので、訳文の終りの所に、次のような紹介文が載っている。

「天路歷程」といふ書は千七百年代英人のジョン・バンヨンと云人が宗教のために苦しみを受け十三年のあひだ獄につながれしとき獄のうちに著はしたる書にして原名を「ピルクレムス・プログレス」と名づけたる夢物がたりの書なり抑此書は世界各国の信者が最も愛顧ところの者にして既に四十余ヶ国の国語に翻訳せられたる程の古今まれなる珍書なれば出版ごとに巻章づゝ意識して婦女子の御覧に備へませふ」(傍線は筆者のもの。以下同じ)

のち単行本出版の際の同誌上の広告文にも「婦女子にも読み易からん為に意識してかな文なれば云々」(四巻四七号八頁)とあり、啓蒙的志向は歴然としている。それでは、「婦女子にも読み易い意識」の実態はどうなのか。先ず有名な巻頭の文章を見てみよう。

我が此世の曠野に行きましたら不斗一ツの穴がありました我がその処に偃臥て睡り一ツの夢をみました但其夢に一人の人が破爛た衣をきて一所に立つみ面は家から転けて他のところを視手には書物を執ち背には大任を負て居りましたがやがて彼の人は手に持ちたる書を展きて観め頻りに戦慄流涕とうとうこらへかねて大声を發げ。我はマアどふしたら善からふやト言ました後宅へ歸りてから務めて其憂さまを妻孥に見せぬようかくして居りましたが之れも又こらへかねて終には。マア賢妻と愛子よ爾の一番親ひものは我のほかにはあるまひが今重荷が我を強をして夫にて大方亡ぬばかりになり又此城も天火の為に焚かれ吾も賢妻も愛子も共に酷しき亡を受ることは疑がひもなく目の前にあり夫ゆへに早く一ツの生路を得ぬなればどふして通るゝことができよふか然しながら未だに其路を知らざるなりと語るを聞し妻と子は大いに愕きました其訳は話を真として聞たのではなく主人が顛ふたのであるふと思ふたゆへなり時に丁度日も暮れかかりしを幸ひに云々

のつけから「我が此世の曠野に行きましたら」といった舌足らずな表現も氣にかかるのだが、今は口語体、文語体の問題に焦点ををしぼることにする。全体としては言文一致というか、口語体が志向されていることは疑いない。しかし上記引用文を検討してみると、「手に持ちたる書を展きて観め」とか「然しながら未だに其路を知らざるなりと語るを聞

し妻と子は」など、あちこちに文語が顔を出しており、また「宅へ歸りてから」「癲ふたのであらうと思ふた故なり」「時に丁度日も暮れかゝりしを幸ひに」など両方の文体が混在している所もあるのに気づく。このような混乱は第一回分において特に著しい。思うに、はじめのうちは、不馴れによる若干の戸惑いが訳者にあつたのであらう。ことに週刊誌なので、訳稿を推敲する閑もなかったものと思われる。二回以降はこの種の混同はほとんど影をひそめ、五回目まではますますの口語体となつてゐる。六回目に至つて少し怪しくなつてくる。ここは注目すべき箇所なので、やや長くなるが引用する。

且隣近所はみな善良人にて相に信じ相に敬ひます故に爾は其処に居て益々安楽ありませふ（此等は只自己の功能に倚頼ものにして真に似て偽るものなれば之が為に遷されざるもの鮮なし）時に基督徒は此語たりを聞猶予と決りかねましたが自思案をなして云よう若しも此人のいふことが真ならば之れに従がふにしくはなしと乃ち復問ねていひますには「基督徒彼の賢人の室には何から往ればよろしうございますか世智助は一ツの西乃山（真神伝十誠の山）といふ山を指さして「世あの高ひ山を爾は御覧なさるか」「甚明見へます」「此山に由ておいでなされ首 到室が則ち其人の家です基督徒は是に於て原路をすて助けを特法に求めんと行て其山に近きたれば山の勢が高圧たるを見て駭き首上に隕下かと思ひ

恐て敢進みもせず佇立たまふ、どふしたゆゑか少しも知らず又肩にあるところの任は原路を行とくに較ぶれば転重くなつたように覺へ山にはまた火焰があつく閃き出づれば基督徒は徒焚れようかと懼れ戦々慄々慄身冷汗を流しました

かなりの混乱振りだが、特に注目されるのは（此等は只……鮮なし）のカッコ内で、この箇所は中国語訳では欄外註になつてゐる（英語の原文にはない註である）。そこで註としては、文語体を用いても抵抗感がなかつたのであらう。現に単行本の方には他にも欄外註がたくさんあるが、全部文語体になつてゐる。

次の「若しも此人のいふことが真ならば之れに従がふにしくはなし」の所も、口には出さぬひとり思案なので、文語になつてもさほど不自然ではない。ことにすぐ前に文語体の註が入つたので、思わずそれにつられて抵抗感の少い箇所が文語体になつてしまつたとも考えられる。文章といへば当然のごとく文語体で綴られた時代のことであるから、これだけ文語体への誘因があると、文語体へ移行することへの心理的障害はいへん小さくなると言えよう。

そのためか次回の第七回分は次のように始まる。

時に基督徒は世智助の言ことに従がひたるを後悔し伝道者の来るを見て

実に赦<sup>はつ</sup>顔<sup>かし</sup>に勝<sup>か</sup>ず伝道者は漸々<sup>だんぐちかす</sup>邇<sup>ちか</sup>きて遂に其側に来りしが貌<sup>かたち</sup>はまことに莊<sup>せう</sup>嚴<sup>げん</sup>にして畏ろしく基督徒に向ふて「伝基督徒よ爾は故<sup>あなた</sup>為此<sup>なにゆへ</sup>に在<sup>お</sup>れるか。

基督徒は一たび此言<sup>き</sup>を聞<sup>き</sup>て何と対<sup>こた</sup>へんよふもなく默然<sup>もくねん</sup>木立たりしかば又いふよう「伝将亡城<sup>かき</sup>の増<sup>かき</sup>の外で我<sup>わたし</sup>が一人の哀哭<sup>かなしみ</sup>大呼<sup>さけぶ</sup>ものに遇ひましたがあれは爾<sup>あなた</sup>ではありませなんだか」基左様<sup>きさやう</sup>我<sup>わたし</sup>です

このあとの二人の会話は口語体で続けられ、最後に伝道者が基督徒に読み聞かす聖書(新約)は文語体になっている。当時聖書の共同訳は進行中だったが、文語体だけだったから、これも自然な成行であった。

八回目から一回目までは、それまでの混迷を忘れたかのように口語体で一貫されている。一二回目になると、ふたたび、地の文章は文語体、会話は口語体のスタイルに戻る<sup>(5)</sup>。はじめの所を例にあげると次のようになっている。

我又夢に基督徒を見れば背上<sup>せなか</sup>にある重任<sup>おもに</sup>は尙元のまゝにして若し之<sup>たすく</sup>を助る者があらざりしならば此任<sup>にん</sup>は終に脱<sup>つ</sup>ぐことのならざる様態<sup>ありさま</sup>なり故に恵慈<sup>けいじ</sup>に問ていふよう「基私のために此任を脱<sup>ぬ</sup>がしてくだされませふか」「恵暫く辛包<sup>な</sup>なされまし救脱場所<sup>きうだつばしょ</sup>に行きましたならば自然に其任は脱ませふ。時に基督徒は束身<sup>みづくみ</sup>して旅仕度を始たり

一三回からは文語体のみとなる。これもはじめの一節だけ見本に引用しておく。

我また夢に釈<sup>しゃく</sup>示<sup>し</sup>が基督徒の手を引<sup>ひ</sup>て一小房<sup>ひとま</sup>のうちに入るを見たり其室内には二人の童子が各椅子に座せり長子の名は情慾<sup>じやうよく</sup>といひ季子<sup>すへこ</sup>の名を忍待<sup>しの</sup>といふ情慾の状は甚だ不満足なれども忍待<sup>しの</sup>は意甚<sup>い</sup>だ恬<sup>ゆる</sup>なり「基情慾の不満足なるは何故なるか」釈彼の管理者が彼が受べき辛を次の年の始に与へんとすれども情慾は之を今年のうちに得たく欲し夫ゆへ云々

この訳はこれ以降終りに至るまで、ついに口語体に帰ることはないのである。文語体への誘因があつて、その影響が波状的に及び、気がついたらいつの間にか文語体になっていたということではあるまいか。

## (一)

ここで、『七一雜報』に連載されたものをまとめた明治一二年刊の単行本『天路歷程』について述べたいと思う。この所は益本重雄氏の『バンヤンと天路歷程——その文献考』(香柏社、昭和三年)に扱われていることかなり重なり合うが、同書の記述には不正確な箇所が少くないので、必要に応じて訂正ないし補足しながら筆をすすめたいと思う。

さて明治一二年一一月に単行本となった『天路歷程』は、和綴木版本

で John Bunyan を約翰本人と書き表しているが、これは訳の元本である中国語訳からの踏襲である。小川義綏の「惟上帝之國与義是求」という朱書の題字、中村敬字の題辞、緒言、著者紹介文と続き、本文は一七三丁。奥付はない。

まず訳者は誰だったのか。中村敬字の題辞は以下のようなものである。

喜峰藤翁我益友 六十蟹文始下手  
雙耳重聽幾乎聾 真成納約苦自牖  
乃由勉強忍耐功 約書十中了其九  
天路歷程前後篇<sup>(12)</sup> 嘉而訳之志深厚  
逢其難読間于余 郵亭馭夫汗且走  
辛苦成冊將鋟板 遍喻婦女及童叟  
嗟翁誠心為是學 天賞至如形影偶  
現世安穩子孫榮 真福矧更天上有

(わが友佐藤喜峰翁は六十になってから横文字を習い始め、ひどい難聴にもめげず、苦勞の甲斐あってだいたい読めるようになった。彼は天路歷程前後篇が気に入って訳す気になってむずかしい所はよく私に質問した。今その出版に当って云々)

これを額面通りに受け取ると、喜峰が訳者であったということになる。事実、永い間そう思われて来たようで、明治三十七年出版の『天路歷程』の訳者池亨吉は、その序言の中でこの訳を「中村敬字先生を後楯と

して佐藤喜峰氏の手に完うせられ」たものと述べ、その後の訳者の一人、松本雲舟もその訳(『天路歷程』警醒社、大正二年)の序の冒頭で「天路歷程を初めて日本に翻訳したのは、故佐藤喜峰といふ漢学者であった」としている。

ところが最初の単行本『天路歷程』の敬字の題辞のすぐあとに一丁分の緒言(これについてはあとでまた触れる)があって、その最後の所に「編輯者 佐藤喜峰誌」とある。また『七一雜報』に掲載された単行本『天路歷程』の広告(四巻四七号、八頁)の中でも「曾て雜誌社の紙上に掲示されたるを佐藤喜峰老人編集校訂し茲に發兌す云々」とあって、翻訳者とは言っていない。これは留意すべき点である。事情を紛わしくしたのは、明治一四年の再版に加えられた奥付に「翻訳人 佐藤喜峰」という表現が取られたことで、二四年に出た『(啓蒙) 天路歷程』<sup>(1)</sup>では「訳述者 佐藤喜峰」となった。

しかし喜峰訳者説には、聞き伝えや憶測を交えて、さまざま否定ないし修正意見がある。斉藤潔は「佐藤喜峰とは假名で実は村上俊吉のことであるといふ」と書き(『明治基督教文学雜藁』羊門社、昭和一三年、一六一頁)、柳田泉は「訳(『七一雜報』連載の訳をさす)は意識で、訳者の署名はないので、編輯長の村上俊吉の手になるものといわれているが(彼の細君は、後になってそう断言したという)然し実際は佐藤喜峰の手になるものともいう。中村敬字の序詩を見てもそう取れる。

佐藤も「雑報」の編輯者の一人であったから、この訳は村上が始め、佐藤が完成したものであったろうか」(『西洋文学の移入』春秋社、昭和四九年、七七頁)と言っている。吉野作造は単行本の敬字の題辞について、「天路歷程の邦訳について」(『愛書趣味』昭和四年一月号、『閑談の閑談』書物展望社、昭和八年に収録)の中でこう書いている——

「佐藤翁と親交のあったと云ふ二三故老に聞くと、成る程彼れはやゝ漢学には通じて居ったが横文字の方は皆目分らなかったと云ふ。第一この『天路歷程』は欧文から訳したのではなく且つ又後篇には及んで居ない。詰り中村先生の所述は全然事実と合はないのである。多分頼まれるまゝに詳しい事歴を聞き糺さず月並の題辭を書き遣ったものであろう。果して然らば之を以て『天路歷程』の訳者を決定する材料と為すことは出来ないと考へる」(一二二頁)と。吉野作造はさらに、「実は『七一雑報』所掲の訳稿は全部村上俊吉氏の筆になることを知っている」とし「之には『七一雑報』創刊当時から村上氏の親友であった本間重慶先生といふ活きた証人が現存して居られる」(同頁)と書いている。かつ雑報誌上、署名の特にないものはおおむね村上の筆によったものである(同頁)という。吉野作造のこの証言は間接ながら信頼性が高いと思う。

この問題については、筆者も先年調べておいたことがあるのでつけ加えておこう。筆者はかつて神田美土代町あたりにあった基督教中央図書

館へ行つて調べたところ、明治一二年の初版が一冊あるのを見出した。これを出版した十字屋の主人、原胤昭の蔵書の一つであつたらしい。その表紙に張り紙がしてあつて、墨で次のように書いてあつた。

佐藤喜峰	訳	小川義綏題字
村上俊吉	編	
一八七九年	中村敬字序	
明治十二年	七一雑報	
木版唐紙摺	連載ノ綴	
	一七三丁	

(8)

このうち太文字の分だけはインキで書かれており、あとから記入されたものと思われる。

インキで記入された「編」という字はその右側に並んでいる「訳」という字を訂正したものであると解される。この張紙の字が原胤昭の手跡であると鑑定できれば決定的な証拠になる筈である。

さらに同図書館にあった明治一九年刊行のホワイト訳『天路歷程』にも、これまた表紙に墨書の張り紙がしてあつて、次のようになっている。

ホワイト氏訳ニ先立ち村上氏ノ七一雑報連載の訳本を佐藤喜峰老人(頑聾)編して刊行す神田錦町二開店の十字屋岩藤錠太郎氏の発刊

なり此の以外にも訳文ありと覚ゆ御記憶を御書入れ願ひます

一八八七 明治十九年第一版

とにかく村上俊吉を訳者とする説はほぼ決定的である。ただし敬字の題辞中、『天路歷程』前後篇云々<sup>(9)</sup>というところがあって、後篇も訳したような口ぶりは事実にあわないと吉野作造が言っている点<sup>(10)</sup>については異議があるので一言する。

小沢三郎氏の貴重な報告<sup>(11)</sup>によると、喜峰には『続天路歷程』<sup>(12)</sup>という未刊の稿本がある由。もと若樹文庫なる蔵書のうちに在ったもので、現在に残念ながらどこへ行ったのか判らない。小沢氏は幸いにしてある経路でその閲覧を許され、報告をしておられる。それによると、これは中国語訳の『続天路歷程官話』を写し取り、それに訓点や送り仮名をつけたものであるという。この稿本は二冊から成り、第一冊の見返しに次のように朱書されている由。

僕不佞ニシテ筆我意ヲ尽ス能ハス並田舎翁ナレハ京語ニ通ゼス<sup>耳聾故ニ七</sup>  
レトモ都人士ト談<sup>年モ在京ス</sup>  
タスル事アタハズ 訛誤多カラシム事ヲ怕ル願意ハ先生之ヲ諒セヨ

松井 詞兄

佐藤 坪

また欄外に、朱筆・墨書などで説明・疑義・質問などが書き込んであ

『天路歷程』邦訳史(一)

る。「小川先生ニ質シ」「植村氏」「是ヨリ以上難読所ハ中村先生ニ質問セリ」などあり、小沢氏はこれらを小川義綏、植村正久、中村敬字のことだろうと推測しておられるが、その通りだと思われる。さらに第二冊の最後の所に「毎度申上ル通り疎漏ノ処猶又御報知奉願候 一二句は愚考致候箇所モ御座候、後音ニ可申上候也 喜峰 妄訓点」(同頁)とある由。さらに、『天路歷程』中の基督徒 (Christian) の美宮 (Palace Beautiful) での会話「妻や子供は我ゆく天路の旅を甚だ好まざるなり」と(単行本、四九丁表)につけられた欄外註に「書名ノ如ク旅ニ巡礼スル人「ピルグリムプロゲレス」ノ情態毎常斯克ノ如キモノ多シ然レドモ亦タ続編ノ女徒ヲ胚胎セリ」とあり、単行本の欄外註は、後述するように(一〇頁以下)喜峰の仕事だとすれば、彼が続篇に興味を持っていたことは十分考えられる。これによって見れば、喜峰はこの続天路歷程についても「中村先生にも質問」しているわけだから、喜峰としては続篇も出来れば出版したかったのであろうし、敬字の方も喜峰が前後篇を出版する積りと思ったとしても不可解なことではない筈である。

(三)

さて佐藤喜峰は雑誌に連載されたこの夢物語を単行本にするだけのことかしかなかったのだろうか。そうではなくて、それ以外にも、小さいかも知れないが、いくつかのことをしているのである。一には自ら緒言

を書いている。二に、単行本のはじめの約一丁分を文語体に改めている。三に、詩形の部分でかれが読みやすくしたものがある。四に、この単行本に独特の欄外註があるが、たぶん喜峰がつけたものと思われる。五に、改善になったかどうかは別として、少くとも連載にはなかった彼による句読点の工夫が若干見られる。以下、これらの諸点について順を追うて述べる。

第一の緒言は確かに喜峰の手になるものであり、出版に至った事情の説明があるので、ここに引用しておく。

一 此書ハ明治九年七一雜報第十五号ヨリ年ヲ追テ訳出セルヲ輯メテ編ヲナス

一 原稿モト婦女子ノ為メニ訳セルモノナレバ俗耳ニ入り易キヲ本旨トス故ニ俚語ヲ用ヒ又、或ハ活字ノ訛假字ノ違モ無ニシモアラズ然トモ深く之ヲ改刻セサルハ本旨ニ背ヲ恐ル且早く上梓シテ信者ヲ増殖スルノ種子ヲ播クニ意急ナレバナリ

一 七一雜報発端ニ云フ如ク該書ハ全世界ニテ四十余国其方言ニ訳シ信者ノ最愛スル珍書也ト 本朝ニ於テ七一雜報ノ訳出ヲ嚆矢トス然トモ未タ一部ノ全書ナキヲ嘆シ之ヲ編輯スト雖モ如何セン之ヲ梓行スルノ財力ナシ顧フニ安クンゾ之ヲ得ル所アラン乎ト教友島亘氏ニ謀ル同氏マタ之ヲ岡見清致氏ニ謀ル岡見氏ハ品川教会ノ信者也欣然トシテ皆ヲ援ル事ヲ

肯シ遂ニ十字屋書舗ニ謀テ之ヲ成就ス実ニ二三子ノ篤信厚志也抑亦 真神ノ安排ニ出ル事ヲ深く信ゼリ 編輯者 佐藤喜峰誌

緒言の中で、本書は「婦女子ノ為メニ記セルモノ」とうたっている。

これは連載分のはじめに掲げられた紹介文中の「意識して婦女子の御覽に備へませふ」の意図を再確認したものに過ぎないが、喜峰が訳の本文に關してした数少い仕事の一つは、前述したように、冒頭の約一丁分を読み易くするつもりで口語体から文語体になおしたことであったというのは、いかにも皮肉である。しかし喜峰の立場に立つて考えてみれば、連載分の口語体の部分のはじめの二割足らずで、あとは文語体であったから、連載中の後半の時期には、全部が文語体であったかのような錯覚にさえ陥りかねなかったろう。そしていざまとめようという段になって、文体の不統一が目につき、圧倒的に多い文語体に統一しようとして少し手をつけたが、意外に労力と時間がかかりそうだ。考えてみれば「婦女子ノタメ」には口語体の方が望ましい、そもそもその意図で始められたものだ。時間の余裕もないから、あとは連載のままで行くことにしよう。緒言の第二項のあたりは、何かそんな状況を思わせる。(吉野作造はこの間の事情について「私の推測では、十二年の単行本出版の時文体を統一せんとして改めかけたのだが、面倒になって途中でやめたのであるまいか」(前掲書、一二〇号)と述べているが、「面倒になって」



だけだったかどうか。)

「婦女子ノタメ」という大義に徹するのだったら、理論的には喜峰は八割余りの文語体の方に手をつけて、それを口語体にすればよかったのだ。これが出来たら喜峰には共訳者の名さえ与えてもよかったろう。それは事実上無理としても、少くとも文語体に直した最初の一分をもとの口語体に戻しておくのはさしてむずかしいことではなかった筈である。それもしないという不徹底ぶりには何かユーモラスなものさえ感じられる。

さてこの冒頭の口語体と文語体の實際がどのようなものを、数行並記して示す。

(口) 我が此世の曠野に行きましたら不斗一ツの穴がありました我がそ  
(文) 我此世の曠野を行 不斗一ツの穴あるところにいたり

の処に偃臥て睡り一ツの夢をみましたが其夢に一人の人が破爛た衣をき其処に偃臥て睡りしかば一ツの夢をみたり其夢に一人の人破爛た衣をきて一所に立つみ面は家から転けて他のところを視手には書物を執ち背上て一所に立ちその面を 転けて他のところを視手には書物を執り背上

には大任を負て居りましたがやがて彼の人は手に持ちたる書を展きて観には大任を負へり やがて彼の人は手に持たる書を 展きて観め頻りに戦慄流涕とうとうこらえかねて大声を發げ我はマアどふしたらめ頻りに戦慄流涕こらへかねてついに大声を發ちさけびいひけるは我は善からふやと言しました」  
いかにせん」

ついでながら、文語体からふたび口語体に戻る所は、なかなか傑作なので見ていただく。

されどその人夜をわたる白日のごとく心やすらはで寝えずよもすがらなげきかなしみ涙とどめあへずして曉におよへり翌朝にいたりて家内の人が機嫌聞に行きましたら又昨日のはなしを 重て告しましたしかし家内の人半分も聞かず意のうちに思ふには何したらあるじの病が除らふかイツソ不情待ったがよからふかと思ひ云々

次に文中の詩形の箇所について。この問題に言及したのは吉野作造で、彼は「雑報の方では省略された詩が、単行本では入れてあるものが

あり、八八丁表と百丁表にある漢詩がそれに当る」という趣旨のことを述べている(前掲書一二〇頁)。

詩形の所は、厳密に言うと、原典で英語の本文のうちに始めから組み入れられていたものと、バニヤンの生前に版を多数重ねた *The Pilgrim's Progress* の第五版以降挿入された十三の銅版画の一つ一つにつけられた四行詩との二種類があつて、その時の挿画が用いられていないこの訳書では当然省かれるべきものであるが、それが無差別に入っている。もつともこれはそもそも中国語訳が犯した誤りで、邦訳はその誤りを踏襲しているわけである。筆者はこれらを検討してみたが煩瑣になるので、ここではその問題に立ち入らないことにする。とも角、詩の所は連載分も単行本も原詩のまま出し、それに日本式の返り点をつけ、さらに全体にルビを振つてある。(但し連載分はひらがな、単行本はカタカナ)一例をあげておこう。

コノヒトクワイゴンキリニアイコス	ホツスホシニレイコンダツセンザイコラ
斯人悔悟切哀乎	欲下保ニ靈魂ニ脱中罪辜上
サイハヒニエテセイイトノツフルフクドウヲ	サシアカスハナレシヨイル セイトニ
幸得ニ聖徒伝ニ福道ニ	指三明離レ死入ニ生途ニ

ところが、雑報の方は一〇回目以降、詩は原文のまま放りこんであるだけになってしまった。それが単行本では全部でいねいに返り点とルビを振つてある。これは喜峰の仕事だと思われる。

単行本の特色の一つは欄外註である。欄外註には、英語の原典についているものや、中国語訳につけられたものもあるが、この邦訳に独特のものも少くないのである。今ここにその実例数箇所をあげてみる。

(本文) 「伝そんならあそこの光耀<sup>ひかり</sup>が見へますか「彼佐様サチラ／＼見へます(三丁表) (註) 具眼ノ人ニ非サレバ此門ヲ目撃スル事能ハズ光ノ閃々タル未タ主ノ恩ノ光昭ヲ得サルナリ

(本文) 扱<sup>き</sup>はや基督徒は泥中<sup>どろのうち</sup>に独輾<sup>ひまわりこま</sup>転<sup>ま</sup>していましたが益精<sup>ますく</sup>をだして其室からはなれ窄門に向ふことを誠心から冀ひますれとも……八丁表(註) 室トハ旧惡ノ譬へ旧惡ノ室ノ方ヨリ離レ遠サカリテ窄門ノ善道ニ向ハント冀ヘトモ今泥中ニアリテ困苦ム事ナリ將亡城ノ旧宅ニ居ル事ト看誤ル事勿レ

これなどは「其室<sup>いへ</sup>からはなれ」という表現のあいまいさに註者みずから迷い、敬字先生か誰かに質したものと推測される。「看誤ル事勿し」という言葉には微笑を禁じ得ない。

霜伯<sup>はしう</sup>(|| 羅馬法王 Pope) が函がみしている前を基督徒が通りすぎる条

り（六六丁表）について

（註）撰者ノ卓識ナルモ猶天主教ヲ敵視スル事ヲ免レサルノ口吻アリ惜哉

（本文）（固財<sup>にぎざうて</sup>＝Hold-the-Worldのことば）聖書にも蛇の如く智くト  
いふにあらずや（一〇四丁裏）

（註）蛇ノミヲ引テ鵠ヲ引カス固先生ノ説アヤマレリ

（本文）其時美徒（＝Hopeful）の云<sup>い</sup>るよう我も固より其事ハ知て居ども余<sup>なんじ</sup>爾の言<sup>こと</sup>ようが厳しきゆへ我に大なる怒りをおこせたり（一三四丁裏）

（註）左ノ頬右ノ頬ハ美徒も此時わすれたりや（カタカナとひらがなの混用は原文のまま）

（本文）時に幽暗驚懼<sup>あつまり</sup>は叢集<sup>あつまり</sup>て基督徒登るとき昏昧前を視て見へず（一六六丁裏）

（註）「登るとき」蓋し或ハ当時ノ誤リナラント云フ又或ハ岸ニ登ル事ト云フ前説穩ナルニ似タリ

「…ト云フ」「…ト云フ」とあるのは諸先生の解答だろう。苦勞の様子

がよく判るような註だ。（なお筆者がこの箇所を英語の原文で確かめたところ「登るとき」に相当する語句はなかった。つまり中国語訳の中の「登時」は余計なものだったわけである。）

これら邦訳に独特な欄外註は喜峰がつけたものと考えるのが妥当である。

もう一つ、わずかながら喜峰がした仕事に句読点のことがある。しかしこれは連載分にもある問題なので、ここでは併せて考察の対象としたい。

句読点<sup>(14)</sup>は一六世紀末から一七世紀の始めにかけてキリシタン文献に初て現れたが、日本語においては文型から文章の終りが判りやすいので、句読点が退化し、のち一八三七年（天保八年）シンガポール版ギョツラフ訳「約翰福音之書」には、・・の四種が用いられ、文学の方では、明治二〇年前後にセミコロ<sup>(18)</sup>ンとして白ゴマ点<sup>(18)</sup>や、が用いられた。

つまり明治一〇年前後には、また句読点のつけ方について規則らしいものは存在しなかったわけである。『天路歷程』の訳者は「婦女子ノタメ」に少しでも読み易くしようという意図が、口語体の採用となり、句読点を入れる試みともなって表れたのである。従って句読点の打ち方も試行錯誤的にならざるを得ず、矛盾や欠陥も少くないが、それが訳者の暗中模索を如実に示していて興味深い。

まず『七一雜報』連載の分について、実例をあげる。

とう／＼こらへかねて大声を<sup>あ</sup>発<sup>は</sup>げ。我<sup>わ</sup>はマアどふしたら善<sup>い</sup>からふやト言<sup>い</sup>ました(一回)

故<sup>わけ</sup>を一々告<sup>つ</sup>げて曰<sup>い</sup>ますには。マア賢妻<sup>よきつま</sup>と愛子<sup>いとこ</sup>よ(同前)

彼の人は伝道者<sup>みやり</sup>を目注<sup>め</sup>「彼人<sup>ど</sup>・何<sup>なに</sup>へ奔<sup>は</sup>りたら宜<sup>い</sup>しきや・伝道者<sup>の</sup>郊外<sup>はら</sup>を指<sup>ゆび</sup>ざして「伝<sup>でん</sup>・あそこに窄門<sup>せまきもん</sup>があるが爾<sup>あなた</sup>にみへますか「彼人<sup>い</sup>・否々<sup>へん</sup>」(同前)

つまり、。も「・も、英語の“のように引用文の始めにつける引用符として用いられている。但し、・は

「彼人<sup>ど</sup>・何<sup>なに</sup>へ之<sup>ゆ</sup>きて宜<sup>い</sup>しきや之<sup>ゆ</sup>く所<sup>ところ</sup>を知りませんからサ・

のように、引用文の末尾に、英語の“のような用い方をされている場合が、第一回分の中でも二例ある。

返観<sup>かりひく</sup>ことも出来ません。(二回目)

この。は現在と同じ用法だが、第二回分全体の終止形は三七あって、そのうち。が用いられているのはわずか六例に過ぎず、あとは句点なしである。また第二回では、

「彼人<sup>おとなり</sup>隣<sup>な</sup>さん何<sup>なに</sup>為<sup>ため</sup>に來<sup>おい</sup>なりました

のように、発言者の名は右へ寄せ、同時に・を省いたが、これ以降この形が定着する。

示<sup>おし</sup>へて呉<sup>くれ</sup>ませふ。(七回)

爾<sup>あなた</sup>に示<sup>おし</sup>へませふ。(同前)

のように句点として。と・が混用されている場合もある。

時に目をあげて仰ぎ見れば常ならぬ早さにて雲の飛はしり。大なる喇叭の響をひゞかせ。其雲の上には数万<sup>すまん</sup>の天使が待位<sup>はんり</sup>たる中に座する人あり。(一六回)

右の例では。が句点と読点の両方に用いられている。

其中に藏めたる神戦の器は神の劍。信の盾。胸を護る義器。救をのぞむ兜<sup>いおり</sup>。功<sup>こう</sup>禱<sup>たう</sup>の器。福音<sup>くふん</sup>の履<sup>く</sup>。(二四回)

ここでは。が現在の・(中マル)のように用いられている。

大切なる巻物を失しこと、二つの獅子を見て退き返らんと思ひしこと、且又なんじが云々(二六回)

読点が行の真中に来ている。ここではあるいは英語のセミコロンのような役を果せなかったのかも知れない。

自ら悔改みづからくひあらためることもやあらん・(三五回)

この回には・が約三〇例、句点として使われているが、それに加えて。が同じく句点として三回用いられている。(因みに、単行本では、この所ではこれらの句点がほとんど取り除かれてしまった。

尊貴・爵祿・品級・勲名・土地・邦国・私慾・宴樂(三七回)

現在と同じ・の用法が見られる。

全体の大まかな傾向を言うと、はじめのうちはさまざまな形式が試みられたが、後半へ進むに従って、読点はほとんどなくなり、句点が。か・で表わされるが、。が次第に優勢となっていく。ただし句読点のついた文章は全体としてはずいぶん少ない。連載分では六六回のうち三一六、八、一七一二三、二五、五〇、六三においては句読点が全くない。その他にも句点が一つか二つ言い訳みたいについているだけという回も少ない。この方面で十分な配慮があったとは言いがたい。

次に単行本における句読点のつけ方を、連載分と異なるものに限って検討する。

引用の形式は

『天路歷程』邦訳史(一)

「基賢兄よ云々」のように始めから統一された。名詞を並列する場合、連載分では。または・が使われたが、単行本では

賢智。敬虔。仁愛。の三人(四五丁表) 敬虔、賢智、仁愛、(同右) 智識。練達。謹守。誠実。等(一二四丁裏)と三種もあって、しかも連載分の・が活かされていないなど、この点では改善されたと言えないだろう。また

今爾のいふ所を按ずるに・基督の義は我が行ふところ真神に納らるゝの後。我を称せうじて義となすと・此毫釐じようりの差さは・千里におよぶものにして・爾の信仰は云々(一五六丁裏)

の例では・が句読点の両方に用いられている。さらに、次のような例がある。

帰りし後あと自みづから悩み自みづから恨うらめば。彼は恥かしきことト云ひ。少しく隣の人に罪を得たる事ありて自ら其失を認しれば、彼の恥かしきことト云ひ。私ひそかに不義ただよぬ財たからを得たる後其不義を知って之を返さんとすれば、彼は恥しき事と云ひ。(七四丁表)

これら句読点のうちで傍線(筆者のもの)の分だけが単行本で追加されたもの。ここでは全部読点であるが、追加の分に。との二種類あるの

は不体裁のそしりを免れない。

これを要するに、単行本の方のパンクチュエーションにはさして見るべきものはないと言わざるを得ない。それにもかかわらず、比較的詳細に紹介したのは、句読点がないのが普通であった時代の、この方面での暗中模索の状況の一例としての意味があると思ったからである。

喜峰は上述のようないくつかのことに、自ら緒言の中で言っているように、出版のための金策にも奔走して上梓を成功させた。単行本の出版に際して村上俊吉と喜峰の間に十分な了解ができていなかったの、トラブルが起きそうになったが、結局は村上が了承して解決したと言う。村上が編集長である『七一雑報』そのもの(四巻四七号)に本書の広告が出ていて「曾て雑誌社の誌上に掲示されたるを佐藤喜峰老人編集校訂し茲に発兌す」とあるのも和解を裏書きしていると思われる。植村正久も「吾が友佐藤喜峰翁<sup>(16)</sup>と呼んでいる喜峰が本書の出版に熱意を燃やしたのは功名心や利得のためとは思われない。普及の功績は彼に帰すべきであろう。

## (四)

次にこの本邦初訳の『天路歷程』の訳しぶりを若干検討してみよう。前述のように、本書は口語体で書かれる筈であったのに、はじめの二

割弱を除いて文語体になってしまった。言文一致の本格的な試みはまたなかった時代だから、口語体の部分には文章として感心できない所が多いのも止むを得なかったと思う。

彼此<sup>おちこち</sup>をかへりみ奔りかけては又止停<sup>とどまり</sup>その有様は行<sup>ゆく</sup>べき路をしらぬゆへだと察<sup>おも</sup>はれます。時にまた一人の伝道といふ人がまゐりまして彼の人に向<sup>むか</sup>ひ「伝おまへは何を哀<sup>かなし</sup>みますか」「彼人<sup>あなた</sup>尊駕<sup>きんが</sup>さんお聞<sup>き</sup>くだされ云々(二丁)

然るに人が若<sup>も</sup>し之の途<sup>ゆ</sup>を行<sup>ゆく</sup>ものは死ぬといひましたなら此説は爾<sup>あなた</sup>が深<sup>ふか</sup>く悪<sup>にく</sup>むべきはずでございます(一七丁表)

などをその例にあげることができる。口語体がいつの間にか文語体に変ってしまった経緯についてはすでに述べたが、もう一つ考えられる理由は、こうしたしまりのない口語の文体に訳者自身も不満で、その不満の意識が潜在的に働いたのではないかということである。

とは言え、口語体の所でも比較的よくできている所もないではない。

一端<sup>いったん</sup>その途<sup>ちよつとやそつと</sup>を試<sup>すて</sup>みた位<sup>くら</sup>いなら小故<sup>せうこ</sup>のことで棄<sup>すて</sup>るといふことがあるものか胆<sup>いくし</sup>小野郎<sup>のやろう</sup>だとして笑ふ者もありいたしますゆへ易<sup>うりぎ</sup>遷<sup>せん</sup>は真<sup>まこと</sup>実<sup>じつ</sup>に面白<sup>おもしろ</sup>次第<sup>しだい</sup>もなく大勢の中に居て暫くは頭もあげえずしていました(九、一〇丁)

などは割合いいきの方だと思う。感心したのは「莫若同往、試徵吾言」の訳である。英語の原文は Come away, and prove my words. 但中国語訳はほぼ文字通りであるが、そこを「マアだまされたと思ふてわたしと偕に往なされ」(四丁表)としたなどはなかなかいい。

実態を知る意味において、誤訳にも若干触れておこう。英語の原文も関係して来るので併せて掲げることにする。

I saw then in my Dream, so far as this Valley reached, there was on the right hand a very deep Ditch

(中) 我夢見此谷、自首至尾、左有深溝

(邦) 我夢に此谷を見るに首から尾にいたるまで左には深淵あり(六丁表)

so far as this Valley reached は中国語では自首至尾でいいのかも知れないが、「首から尾にいたるまで」は少しおかしい。ついでに小さいことだが、右と左を中国語訳で間違ったのを邦訳はそのまま踏襲している。

Faithful; Do you know him then? Christian; Know him! Yes, better than he knows himself. (八後半) クリスチャン「彼を知っているのですって、そうですとも、彼が自分を知る以上によく知っていますよ」の意

(中) 彼不自識、我識之矣

(邦) 向ふからは識らねども我は之を識っておるなり(七、八丁) 傍線の所は少し取りちがえたようだ。

pray my Brother forgive me, I did not do it of an evil intent

(中) 但非固意、惟祈恕我

(邦) 然とも固意にあらざれば惟祈して我を恕せよ(一一六丁表) じいの pray は「べうか」の意味だから「祈して」ではおかしい。

and your walk and talk shall be every day with the king

(中) 日日與主互言共遊

(邦) 日々主と互ひに言ひ互にあそび

中国語の遊は walk の訳だから遊歩の意味であらう。とすれば、邦訳の「互にあそび」は意味がずれて来る。

以下は誤訳ではないが、興味を惹かれた点一二をつけ加えておこう。有名な Vanity Fair (虚栄の市) の一節 Here is the Britain Row, the French Row, the Italian Row, the Spanish Row, the German Row where several sorts of Vanities are to be sold.

(中) 其中街衢甚多、有若中華衢、安南衢、天竺衢、英吉利衢、花旗衢

仏蘭西衝、呂宋衝、荷蘭衝、暨各方諸衝、悉有虛華物発売

(邦) また其大都府の中には多くの街衝あり即ち支那。印度。英吉利。亜米利加。仏蘭。荷蘭等の如きありて云々(九二丁表)

ここは『七一雑報』の方の訳では、街路名の筆頭に日本を加えているのである。パニヤンが列挙した国名の先頭が Britain Row であるから、各訳が自国を真先に出すのは、ある意味で意識と言えないこともないが、それに続く国名もまちまちで、何か茶目気さへ感じられる。単行本の方から、「日本」を取り除いてしまったのはたぶん喜峰だろう。喜峰はユーモアを解さぬ人であったのではあるまいか。

For this Roll was the assurance of his life and acceptance at the desired Haven.

(中) 蓋彼得生、後将入天城、皆憑此卷拠

(邦) 如何となれば此巻物は彼が生命の請合にして又至らんとするところの港(天国)においてもその入るときの証書なれば云々(四二丁表) the desired Haven は中国語訳では天城とされているが、邦訳で港となっているのは、邦訳が中国語訳を経ずに直接英語と結びついていることを示している。どうしてそうになったのか判らないが、他に類例がないので注意を惹く。

最後に、本書に出てくる人名・地名について述べてみたい。『天路歷程』は寓意物語だから、それらの名前が重要な意味を持つので、訳の場合にも細心の注意を払う必要がある。本書では大体において中国語訳を踏襲していると言えよう。

Christian	基督徒	Faithful	尽忠
Hopeful	美徒	By-ends	利徒
Shame	耻善	Ignorance	無知
Giant Despair	はじめは「絶望」であったが連載分では途中から「ゼンバウ」に変わった。単行本では全部「絶望」に統一された。		
City of Destruction	将亡城		
Slough of Despond	憂鬱泥		
Hill of Difficulty	艱難山		
Palace Beautiful	美宮		
Doubting Castle	疑寨		
Delectable mountain	樂山		
また、字は同じ中国語訳のものに日本的なルビをふってあるものもある。これらは日本式命名と考えてもいい。			
Obstinate	鋼執 <small>こてし</small>	Pliable	易遷 <small>うしゆせ</small>
Talkative	唇徒 <small>くははかり</small>	Atheist	罔天 <small>てんた</small>
Vanity Fair	虚華市 <small>きやうかし</small>		



日本式命名もいくつかある

Worldly-Wiseman 世智助(中国「世智」)

Mistrust 疑<sup>うたがひ</sup>の助(中国「懷疑」)

Timorous 臆病左衛門(中国「心驚」)

これらの命名法も、だいたい散漫で、無造作が感じられる。

柳田泉氏が、明治初年の翻訳文学の特色として「翻訳紹介されたもののうちには文学として立派なものもあるが、紹介者の意識に文学尊重の念がなく、また周囲一般がまだそうであるから、内容本位で、これを紹介して西洋なるものを幾分でも知らしめ、自国民の教訓啓蒙に資すれば足りるというだけ、立派な文学だから文学らしくとか、原作のもつ真の美しさを出すとかいうことは考えてもしていない<sup>(17)</sup>」という言葉は、残念ながら本書の場合にも当てはまりそうだ。

しかしながら、基になった中国語訳がしっかりしていたため、明治初年という時期に *The Pilgrim's Progress* のかなり正確な内容が日本語で読めるようになったことは、啓蒙的な意味でも、キリスト教伝道の上でも、たいへん幸いなことであつたと思う。また言文一致の運動の起る以前における稚拙ながら口語体の試みの一例として注目される。

その後、現在に至るまで、『天路歷程』の邦訳は十指に余るが、本書は、その幾多の欠点にもかかわらず、そのさがけとしての名誉と栄光

を担うに価するものと筆者は考える。

その後に出た諸訳については、また改めて書いてみたい。

注

- (1) ミュアヘッドとバーンズに関しては、小沢三郎『幕末明治耶蘇教史研究』(日本基督教団出版局昭和四八年)中の「天路歷程の日本版について」二〇五—二〇八頁参照
- (2) *The Pilgrim's Progress* の邦訳は明治初年から現在に至るまで数多いが、そのほとんどが天路歷程という題名を踏襲しており、例外は青芳勝久の『巡礼の旅』(昭和六年)ぐらいなものである。
- (3) 佐波亘『植村正久と其の時代』五卷五八七頁
- (4) 『七一雑報』七一とは七日に一度の意味。明治八年創刊のわが国最初のキリスト教週刊誌。
- (5) 新約聖書の共同訳は明治五年に始められ、一三年に完成された。文語体である。明治一四年に井深梶之助の「俗語新約聖書馬可伝」が出たが、マルコ伝だけだし、専ら宣教師のためのものだった。佐波亘『植村正久と其の時代』四卷三六七—三八頁参照
- (6) この一二回分について益本重雄『バンヤンと天路歷程—その文献考』(香柏社、昭和三年)に「この時から会話も全部文章体となっている」(六〇頁)とあるは事実反する。
- (7) (啓蒙)『天路歷程』吉野作造の「天路歷程の邦訳に就て」(『閑談の閑談』所載)において、「啓蒙天路歷程というのは佐藤本を更に抄約したものではあるまいか、更に大方の示教に接したい」(一一九頁)とあるが、この本についての言及は益本重雄氏の前掲書にもない。うっかりするといわゆる幻の書にもなりかねない。幸い筆者は一冊を所蔵しているので、比較的詳しく紹介しておく。

画像  
非公開

表紙(黒表紙和綴)

画像  
非公開

見返し（真赤な紙を用いてある）

画像  
非公開

肖像画

画像  
非公開

略 伝

この一頁分の略伝の末尾に漂泊子とあるのは誰か不明。略伝中、バニャンが学校へ行かなかったとか、一子を遺して死んだとか、多少の誤りはあるが、一応のことは述べられている。

画像  
非公開

本文第一丁表

略伝と奥付の間にはさまれた本文一丁から一七三丁までは明治十二年間の木版をそのまま用いたもので、明治十四年の再版に続き、実質的には第三版と見ることができる。

画像  
非公開

奥 付

ごらんのように佐藤喜峰には訳述者という紛らわしい言葉が使われている。

『天路歷程』邦訳史(一)

- (8) 筆者がこれら二つの貴重な張り書を見たのはだいぶ前のことで、現在はコピーも取りやすいのでもう一度見せてもらって確認しようとしたが現在、同図書館は閉鎖され、本は東京神学大学の未整理図書として保管されていて残念ながら閲覧不可能ということであった。
- (9) 後篇というのはクリスチャンの家族たちが旅に出る後日譚で、それが *Second Part of the Pilgrim's Progress* と言われた。それに対応させて元の物語が *First Part of the P. P.* と呼ばれるようになったものであるから文字通りには第一部、第二部ということになるが、日本語では前篇、後篇というよりも、正篇、続篇と呼ぶ方が当るであろう。
- (10) 吉野作造、前掲書、一二二頁。益本重雄氏も「無面識の頼まれ序文なものだから序文と内容が違っている」と言っておられる由(小沢三郎『前掲書』二四六頁。)
- (11) 小沢三郎前掲書二〇九頁。
- (12) 「官話」は中国語の標準語を意味する。東京女子大学の図書館には『天路歷程官話』(上海美華書館、一九二二)がある。その序文を見ると、これまでの『天路歷程』をもっと忠実に、きめ細かな訳に改めたという趣旨のことがうたっている。比較してみるとかなり違っているが、あくまで改訳であって新訳ではない。
- (13) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(春秋社、昭和三六年)にこの訳について「訳文が大部分口語体であるのは注意すべきである」(一七〇頁)とあるのは事実に反する。
- (14) 平凡社『世界大百科辞典』「句読点」の項。
- (15) 『キリスト新聞』昭和三〇年六月二五日および七月二日刊(四四〇、四四一号)所載の「『天路歷程』の漢邦訳——出版の歴史に就て」による。それによると、この間の詳しい事情は益本氏の『バンヤン天路歷程絵物語』(教文館、昭和十一年)に記されている由であるが、未見。
- (16) 佐波亘『植村正久と其の時代』五巻五八六頁、『六合雑誌』よりの引用。

(17) 柳田泉 前掲書 一三頁。

〔本学文理学部教授(英文学) 一九七六、七七年度 個人研究員〕